琵琶占い

岡田　充博

一

琵琶は起源を古代イラン（ペルシア）あるいはインドに持ち［1］、異国の情趣を奏でる楽器として六朝唐代の辺塞詩にしばしば登場する。「葡萄の美酒　夜光の杯、飲まんと欲すれば　琵琶　馬上に催す（葡萄美酒夜光杯、欲飲琵琶馬上催）」と詠われる王翰の「涼州詞」は、その代表と言えよう。唐代に至って大いに流行した［2］この楽器は、宮廷音楽の中でも重要な役割を担い、楊貴妃も梨園で琵琶を演奏したと伝えられる［3］。「潯陽江頭　夜　客を送れば、楓葉　荻花　秋に索索たり……　忽ち聞く　水上　琵琶の声、主人は帰るを忘れ　客は発せず（潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索索。……　忽聞水上琵琶聲、主人忘歸客不發）」に始まる白居易の「琵琶行」は、嘗て宮中教坊でこれを奏でた、一人の妓女の哀れな運命を詠った作品として名高い。

このように、唐代の詩歌と深く関わる琵琶であるが、意外なことに占いの際にも用いられたようである。中唐の鬼才李賀の詩「悩公」（『昌谷集』巻二、『全唐詩』巻三九一）に次のような一聯がある。

跳脱看年命　跳脱に年命を看
琵琶道吉凶　琵琶に吉凶を道ふ

「跳脱」は、「条脱」とも記し、腕輪のこと。この腕輪そのものを使って占うとする説と、これを礼物として贈って占ってもらうとする説とに分かれる。

続く「琵琶」の句については、この楽器を奏でて吉凶を占うという解釈で諸注は一致している。対句表現の意味の流れから考えると、「跳脱」の句も腕輪による占いと見るのが自然なように思われる［4］が、それはさて措いて、ここから琵琶が占いの際の道具でもあったことが分かる

李賀にはまた「神弦」と題する作があり（『昌谷集』巻四、『全唐詩』巻三九三）、鬼神を招く巫女の様子が詠われている。彼女は酒を注ぎ香を焚き、紙銭を焼いて準備を整えた後、次のように振る舞う。

相思木帖金舞鸞　相思の木には帖く金の舞鸞
攢蛾一嗟重一彈　蛾を攢めて一嗟し重ねて一彈

「相思木」は、熱帯産の樹木の名。巨木で材質が堅く、琵琶の材料ともなる。この樹で作った琵琶の胴に、金の鸞の模様が飾られていることをいう。「攢蛾」は、美しい蛾のような眉を顰める。「嗟」の原義は、ついばむ、すする。この場合、祝詞などの一節を唱えると解釈されることが多く、意味の通りもよい。ただ漢訳仏典などでは、「嗟」はしばしば「嚙（くしゃみ）」の意味で用いられており、私見では敢えてこちらを取りたい気がする（その理由は、注11を参照）。

ここに詠われているのは、吉凶占いではなく神迎えの祭祀であるが、やはり琵琶が奏でられている。ところで、こうした占いや祭祀で用いられる琵琶については、他にどのような資料があるのであろうか。先ずは唐代の文献から当たってみることにしたい。

二

冒頭で触れたように、琵琶と唐詩の結び付きは深く、この楽器の名が見える作品は百を越える。ただ、琵琶占いと関わる内容のものは少なく、管見では前掲の李賀の詩を除けば僅か三首である。そのなかで、同じ中唐の王建の二首は貴重な資料と言えよう。彼の「賽神曲」（『王司馬集』巻二、『全唐詩』巻二九八、『王建詩集校注』巻一）と「華嶽廟」（『全唐詩』巻三〇一、『王建詩集校注』巻九）［5］には、それぞれ次のような描写が見える。

男抱琵琶女作舞　男は琵琶を抱き　女は舞を作し
主人再拜听神語　主人は再拜して神の語を听く
（「賽神曲」）

女巫遮客買神盤　女巫　客を遮りて神盤を買はしめ
爭取琵琶廟裏彈　爭ひて琵琶を取りて廟裏に彈く
（「華嶽廟二首」其一）

「賽神曲」の「賽神」は、農事が終わった後、収穫を感謝して神を祭ること。そうした祭事の場で、男性が琵琶を奏で女性が舞い、祭主が神託を拝聴する情景が歌われている。ただ、村を挙げての感謝の祭りということであれば、琵琶を弾き舞踏する男女は巫覡のみとは限らず、農民達の場合も考えられよう。

「華嶽廟」は、華山の麓に立つ古廟。華山は陝西省華陰県の南にある名山で、五岳の一つ（西岳）。険峻を以て知られるこの山は、道士たちの修行あるいは隠棲の場であり、故事伝説も多い。「神盤」は、神を祭る際に供物を載せる大皿であろう［6］。この廟に仕える巫女達が、旅人を引き留めてこれを買わせ、琵琶を廟中で弾き神託を伺うのである。「賽神曲」では男性が琵琶を弾いていたが、このように巫女が弾くのが一般的である。

このほか、中唐の王叡「祠漁山神女歌」（『全唐詩』巻五〇五）にも「根根たる山響　琵琶に答へ、酒は青莎を湿し　肉は鴉を飼ふ（根根山響答琵琶、酒溼青莎肉飼鴉）」とある。二句は、「琵琶の音に答えるかのように山（山神）が共鳴し、供物の酒がハマスゲに零れ、肉がカラスが啄まれる」の意味で、占いあるいは神降ろしの行為を直接描写している訳ではない。しかし、漁山（河北省薊県の西北）の神女の祭祀でも、琵琶の演奏は重要な役割を果たしていたのである。

これらの詩句によって、廟神の祭祀あるいは神降ろしの際に、琵琶が用いられたことが明らかになる。ただ、こうした詩歌の資料のみでは、やはり占いという点で具体性に欠けるところがある。そこで調査の対象を筆記小説類に向けてみると、興味深い資料に行き当たる。例えば初唐の張鷟『朝野僉載』巻三には、次の二つの記事が見える［7］。

私（浮休子張鷟）が徳州平昌（山東省）の県令であった時、大旱魃があった。郡の太守は命令を下して巫女や僧侶に祈禱をさせたが、二十余日にわたって効験がなかった。私がそこで土龍（雨乞い用の土製の龍）を推し倒したところ、その夜に十分な降雨があった。

江淮の南の地は鬼神を好み、邪俗が多く、病気になるとそれを祭って、医者もいない。私は嘗て

江南の洪州（江西省）に数日留まったことがあり、この地の何婆が琵琶卜を善くすることを聞き、同行の郭司法と共に確かめることにした。

その何婆は、門前を士女が埋め尽くし、贈り物は道路にまで満ち溢れ、喜色満面、意気軒昂な様子であった。郭は再拝して銭を与え、自分の品秩（官位の等級と俸給）について尋ねた。何婆はそこで琵琶の弦と柱を調え、声を唱和させて言った、「この御方は身分高く、今年は一品を得、明年には二品を得、翌年には三品を得、さらにその翌年には四品を得られましょう」と。郭は言った、「阿婆よ、間違っている。品数の少ない方が官位は高く、品数の多い方が官位は低いのだ」と。すると何婆は、「今年一品を減じ、明年には二品を減じ、翌年には三品を減じ、そのまた翌年には四品を減じ、さらに五六年すると総て品を無くされよう」と言った。郭は大罵して座を立った。

長安崇仁坊の阿来婆は琵琶を弾いて占い、朱や紫の衣服の貴人たちが門を埋める賑わいであった。私（浮休子張鷟）が以前その様子を見に出かけたところ、一人の紫袍玉帯の大変立派な将軍が、一疋の紬綾（一に綢綾に作る。紬と綢は通用し、絹織物をいう。）を降ろして、一局の占いを請うていた。来婆は琵琶の弦柱を鳴らし、香を焚き、眼を閉じて、「東のかた東方朔に告げ、西のかた西方朔に告げ、南のかた南方朔に告げ、北のかた北方朔に告げ、上のかた上方朔に告げ、下のかた下方朔に告げん」と唱った。将軍は頂礼（頭を地面につけ、尊者の足を拝する礼）が終わると、請い願う占い事は甚だ多く、仔細に看て疑惑を解決してくれるよう強く望んだ。すると彼女はすぐさまそれらを随意に処理していった。

何婆と阿來婆二人の巫女が行った琵琶による占いは「琵琶卜」と呼ばれ、廟中から離れて巷間において行われている。門前列をなす賑わいからして、この占いが如何に盛行していたかが窺われる。また何婆は江南の洪州、阿來婆は都の長安と、居住活動の地が南北に分かれていることから推測すると、琵琶卜は唐代初期においてすでに、かなり広汎な地域にわたって流行していたようである。なお『朝野僉載』のこの話は、『太平広記』巻二八三・巫に「何婆」「來婆」と題して収録され［8］、若干の字句の異同が見られる。

『太平広記』について触れたところで、同書から

参考となる資料を幾つか追加しておくことにしたい。同じ巻二八三・巫部には、「白行簡」がある（出典は唐・裴約言『霊異記（霊異志）』）。これは行簡が見た夢の中での出来事ではあるが、巫女が琵琶トを行う次のような話である［9］。

唐の郎中の白行簡は、大和の初年（八二七）に大酔がもとで、二人の使者に連れられて春明門を出る夢を見た。或る新しい塚のあたりに差しかかったところで、空が白みかけ、引き返すことになった。城門まで戻って来ると、餅屋の店があった。行簡はひどく腹が空いたので、二人の使者にそれを告げている時、不意に店の女が赤ん坊を抱いて現れた。すると使者は小さな土塊を行簡に与え、赤ん坊に当てさせようとした。行簡がその言葉通りに土塊を投げつけると、赤ん坊は驚いて泣き気絶してしまった。店の女は「子供が悪気に当たってしまった」と言い、人を遣って一人の巫女を呼んで来させた。巫女は香を焚き、琵琶を弾いて神霊を招いて言った、「他でもない、つまらぬ魍魎の悪さに過ぎぬ。総勢三人、うち一人は生きた魂で、酒食を求めておるだけで、祟りはせぬ。急ぎ餅を作り、酒を取り寄せよ」と。すぐに酒食が並ぶと、巫女は拝謁し、使者二人は行簡とともに坐に就き、腹一杯食べて立ち上がった。すると赤ん坊は元通りに回復した。行簡は目覚めて大層厭な気分だったが、のち十日余りして亡くなった。

ここでは、鬼のために気絶した幼児を蘇生させるのに巫女が呼ばれ、琵琶を弾く。その音色によって神を招請し、神の憑依の後に巫女は、気絶の原因と蘇生の方法について神託を宣べるのであろう。

これとほぼ同じシチュエーションが、『太平広記』巻三四一・鬼二六「韋浦」（出典は唐・薛漁思『河東記』）にも見られる。全文を引くには長過ぎるので、左には該当箇所のみを訳出する。話は韋浦という人物が吏部の選考に赴くところから始まる。途中の旅店で彼は帰元昶と名乗る男に出会い、下僕として雇う。従順でしかも機転の利く元昶を韋浦はすっかり気に入るが、実はこの男は人間ではなく幽鬼であった。都を目指して潼関（陝西省潼関県の東北にあった関所）までやって来たところで、元昶は或る事件を引き起こす［10］。

潼關に泊まると、宿の主人の子供が戸口で遊んでいた。すると帰元昶が手でその背を突き、子供

が驚き苦しんで気を失うのが見えた。しばらくしても意識が戻らず、宿の主人は「この症状は、悪気に当たったものだ」と言い、二娘を大急ぎで呼んだところ、随分経ってやっと姿を見せた。二娘は巫女であった。やって来ると琵琶を奏でて神を迎え、大きく口を開けクシャミをする［11］こと長くして言った、「三郎が参った。主人に伝える。これは客鬼が祟りをなしておるのじゃ。わしがそやつのことを取り調べよう」と。そしてその容貌と服装を告げたが、まさしく帰にそっくりであった。さらにこう言った、「もし蘭の湯を浴びせれば、この疾患は除かれるであろう」と。その言葉通りにすると、子供はたちどころに平癒した。浦は帰のしたことを見て彼が憎くなり、巫女が語るに及んで帰を呼びつけたが、彼は現れなかった。

鬼が幼児を気絶させてしまい、巫女が治療に呼ばれて琵琶によって神降ろしをするという展開は、先の「白行簡」の話と重なり合う。気を失った幼児の症状を指す「中惡」も、悪気に当たって急病にかかること、あるいは錯乱譫言・昏倒失神などの症状を引き起こす病気「中邪」を意味する言葉で、同一の表現となっている。こうしてみると「琵琶ト」は、神廟における祭祀、あるいは吉凶の予言のみに留まらず、唐代においては民間医療の呪術としても広く行われていたようである。

さらに巻三八四・再生一〇に「王勲」がある。この話は、華岳廟の女神の像に誘いかけ、罰が当たって即死した男が、神巫の祈祷で生き返る話（出典は唐・戴孚『広異記』）であるが、蘇生した彼の科白は、次のように始まる。「私はあちらの世界で何の苦しみもなかったのに、どうして巫女に琵琶を弾かせて私を呼ぶようなことをしたのか（我自在彼無苦、何令神巫彈琵琶呼我爲）」。つまり、この神巫も琵琶を奏でて祈祷を行っており、しかもその場所が華岳廟であるところが興味深い。先に挙げた王建「華嶽廟」と同じ神廟で、しかも『河東記』「韋浦」の舞台潼関とも近い。『広異記』の成書は貞元五年（七八九）前後と『河東記』より半世紀ほど早いが、「韋浦」の二娘は、この神巫と同系の巫女集団に属していたのであろうか。また、神巫が呼び出すのが、肉体から遊離した王勲の魂である点にも留意しておきたい。琵琶トは、降臨した神霊に処方を伺うという二段階の手続きを踏むことなく、直接死者（あるいは仮死者）の招魂を行う場合もあったのである。

この他に、巫が用いる楽器を「胡琴」とする話も

二例ある。『漢語大詞典』によれば（第六冊、一二一五頁）、「胡琴」は古くは北方・西北方の異民族から伝来した弦楽器の総称で、琵琶もその中に含まれ、唐代においては琵琶を指しても用いられている。二つの資料の一つは、やはり巻二八三・巫部に所収の「許至雍」（出典は唐・裴約言『霊異記』）で、男巫趙十四が許至雍の亡妻の魂を招く場面が、次のように描写される。

…そこで良日を選んで、室内を掃き清め香を焚き、西の壁のもとに寝台と肘掛けを置いた。軒の外には祭壇場を設け、酒と干し肉を供え、声を長く引いて呼びかけ拝舞し、胡琴を弾いた。日暮れになると、許至雍を母屋の東隅に座らせ、趙生は軒下に簾を垂らして横になった。沈黙のうちに真夜中になり、不意に庭に人の歩む音がした。趙生がそこで「許秀才の奥方ではありませんか」と問いかけると、悲しげな溜息が数度して、「そうです」との答えがあった。［12］

これは招魂の儀式であって占いではなく、夫人の霊が現れるのも時間を経た真夜中であるが、室内を清め香を焚き供物を供えるなど、準備の具体的な叙述が参考になろう［13］。

もう一つは、巻三〇七・神部一七の「裴度」（出典は唐・盧肇『逸史』）で、裴度が家人の病気の際に女巫を呼ぶと、彼女は「胡琴を弾き、顛倒することやや久しくして、やおら立ち上がり（彈胡琴、顛倒良久。蹶然而起）」、北斗廉貞星神からの伝語として裴度がこの神を祭らなかったことを詰る。巫のクシャミはないが、倒れて人事不省になった後、神霊が憑依するのであろう。

三

以上、琵琶卜について、残された唐代の資料をもとに考察してみた。僅かな断片を拾い集める作業ではあったが、この時代における盛行の様子と、それを行う巫女の振舞の一端は、窺い知ることが出来たのではないだろうか。

続いて問題となるのは、この占いの起源と唐代以降の消長ということになるが、これに関する管見の資料はさらに零細なものとなり、手詰まりの状態を抜け出せない。左に列挙して結びに代え、識者の方々からの新たな情報を期待することにしたい。

先ず、唐代以前の琵琶卜について。神を迎える祭

祀の際、中国では古代から歌舞や音楽が伴うのが常であった。しかし、そこには琵琶トを想起させる記事はなく、最も早い資料は、結局、六朝の志怪小説にまで降ることになる『太平広記』によれば、巻三二二・鬼七の「蠻兵」に、占いの際に琵琶を奏でる事例が見える。出典は『霊鬼志』とあり、東晋の荀氏の撰で、次のような話である［14］。

南平国（晋の南平郡を指すか？現在の湖北省内の地）の蛮族の兵士が、義熙（東晋・安帝の年号、四〇五～四一八）の初めに、衆を従えて姑熟（安徽省）にやって来た。すると幽鬼がこの男に取り憑いて、声は呦呦と細く長く、ある時は屋根の檐（のき）あたりに、ある時は庭樹の上に止まった。吉凶を占う様子で、そのたびごとに先ず琵琶を求め、その演奏に従って告げるのであった。その時、郄倚が府の属官で、官を移ることになるかどうか尋ねたところ、「久しからずして節（天子の使者であることを示す旗）を持って赴任されるでしょう」と言った。すると間もなく彼は南蛮校尉となった。私はこの国の郎中であって、親しくこの土地を治めていた。荊州の民間の言い伝えでは、「これは年を経た鼠の仕業で、『鬼侯』と名を呼んでいる」という。

巫女ではなく、蛮兵に鬼が憑依するのであるが、琵琶を奏でて吉凶を占う方法は唐代の巫女達と同じで、これが「琵琶ト」と何らかの繋がりを持つことは明らかであろう。ただ、この話以外には資料が全く見当たらず、起源への遡行はここまでに止まる。またこの話の舞台である姑熟（安徽省当塗県）は、『朝野僉載』の何婆が住む洪州（江西省南昌県）と共に長江以南の地で結びつけ易いものの、阿来婆や華岳廟の巫女が活躍した北の長安周辺とは、どう繋がるのであろうか。琵琶が外来の楽器であることを考えると、南方からの伝播とは別の、西域経由の可能性も想定されるべきで、西の異国におけるこうした占いの存否が大いに気になるところである。ただ、この方面の知識が皆無で、やはり疑問として残すしかない［15］。

次に、宋代以降の琵琶トについて。これに関しては、「琵琶」「胡琴」いずれについても手がかりが極めて乏しく、元明に至って、やっと三件の資料が見つかる。一つは元末明初の楊維楨の「西湖竹枝歌（一に「小臨海曲」に作る）」（『鉄崖古楽府』巻一〇）で、恋煩いの女性を次のように詠う。

病春日日可如何　病春　日日　如何にすべき

起向西窓理琵琶　起ちて西窓に向かひて琵琶を理む
見説枯槽能卜命　見る説く　枯槽は能く命を卜ふと
柳州衖口問來婆　柳州の巷口に来婆を問はん

「枯槽」の「槽」は、琵琶の胴上で弦を固定する突起部分。基づくところがあると思われるが未詳。結句は、『朝野僉載』の来婆の話を踏まえている。

次は明の高啓「憶遠曲」（『高太史大全集』巻二）で、旅に出て帰らぬ夫を待つ妻の胸中を詠い、その中に左のような一節がある。

櫻桃熟時郎不歸　桜桃　熟す時にも郎は帰らず
客中誰爲縫春衣　客中　誰か為に春衣を縫はん
陌頭空問琵琶卜　陌頭　空しく琵琶卜に問ふも
欲歸不歸在郎足　帰らんと欲するか帰らざるかは　郎の足に在り

今一つは、これも明代、張璨に「惱公詩題遊春士女圖」の五言排律がある（明・曹学佺編『石倉歷代詩選』巻三七七所収）。李賀の「惱公」詩に擬えた作で、「遊春士女図」に題したものであるが、愛する男を思う美女の描写のなかに、次のような一節が見える。

絶艶方如此　絶艶　方に此の如ければ
幽懷定若何　幽懷　定めて若何
琵琶勞問卜　琵琶　問卜を労し
烏兎恐蹉跎　烏兎　蹉跎たるを恐る

「烏兎」は、太陽にいる三本足のカラスと月に住むウサギ、転じて歳月。「蹉跎」は、時期を失する。

以上、宋以降の資料［16］を改めて確認してみると、いずれも愛する男を案じて占いに縋る女性のことを、唐代の「琵琶卜」を典故として詠ったもので、この占いが元明の時代に実際に行われたことの証左とは必ずしもならない。調査はなお充分とは言えないが、宋代に関連資料が見当たらないことを考え合わせると、唐代に盛行した「琵琶卜」は、以後急速に衰退していったと思われる［17］。

楽器としての琵琶が後世受け継がれていったにも拘わらず、広く民間にも行われた琵琶占いが、何故そのように忽ち姿を消してしまったのか、あるいは実はそうでなかったのか、この問題も解けない大きな謎である。

注

1　琵琶には幾つもの種類があるが、典型的な四弦琵琶は、古代イランから中央アジアの天山南路を経て、紀元前二世紀（前漢）に中国に伝わった。イランのバルバト（barbat）が琵琶（ビハ）の語源ともいわれる。五絃琵琶は、古代インドの代表的な楽器で、天山南路を経て六世紀（南北朝時代）に中国に伝わった。（『ブリタニカ国際大百科事典』一九八八年改訂版、および『中国大百科全書　音楽　舞踏』一九八九年の「琵琶」の項による。）

2　清・銭泳『履園叢話』巻一二・芸能「琵琶」に、次のように言う（中華書局・清代史料筆記叢刊本、一九七九年）。「琵琶は本と胡楽にして、馬上に鼓する所なり。大約 晋・宋・斉・隋の間に起り、有唐に至りて極めて盛んにして、賀懐智・康崑崙・王芬・曹保及び其の子の善才の若きは、皆 伝襲有り。…（琵琶本胡樂、馬上所鼓。大約起于晉宋齊隋之間、至有唐而極盛、若賀懐智康崑崙王芬曹保及其子善才、皆有傳襲。…）」。

3　『太平広記』巻二〇五・楽三・琵琶「楊妃」（出典は唐・胡璩『譚賓録』）に、開元年間に宦官白秀貞が蜀から持ち帰った琵琶を、楊貴妃が愛用して梨園で演奏したことを記す。諸王貴主や虢国夫人たちが、競って貴妃の琵琶の弟子となり、曲を学んだという。

同じ記事は、『太平御覧』巻五八三・楽部二一・琵琶、『白孔六帖』巻六二・琵琶一の項にも見えるが、出典を『明皇雑録』とし、天宝中の出来事となっている。

4　清・王琦『李長吉歌詩彙解』も、後者の説を支持している。なお、この句に関する王琦の注には、本稿の後文において取り上げる『朝野僉載』『異苑』の記事が、例証として引かれている。

5　「華嶽廟」詩は、『王司馬集』全八巻（四庫全書本）には収録されておらず、王宗堂『王建詩集校注』（中州古籍出版社、二〇〇六年）に拠った。なお王宗堂氏の校注は関連資料の引用も多く、拙稿執筆に当たって参考にさせていただいた。

6　先に引いた李賀「神弦」の続く一聯には、「星を呼び鬼を召して　杯盤を歆（う）けしむ、山魅 食する時　人は森寒たり（呼星召鬼歆杯盤、山魅食時人森寒）」とある。この「杯盤（供物の酒食を容れる酒器と大皿）」の「盤」を、「神盤」と言ったものであろう。

7　中華書局・唐宋史料筆記叢刊本（一九七九年）によれば、原文はそれぞれ次の通り。

浮休子張鷟爲德州平昌令、大旱。郡符下令以師婆、師僧祈之、二十餘日無效。浮休子乃推土龍倒、其夜雨足。江淮南好鬼、多邪俗、病卽祀之、無醫人。浮休子

曽於江南洪州停數日、遂聞土人何婆善琵琶卜、與同行郭司法質焉。其何婆士女填門、餉遺滿道、顔色充悦、心氣殊高。郭再拜下錢、問其品秩。何婆乃調弦柱、和聲氣曰、箇丈夫富貴。今年得一品、明年得二品、後年得三品、更後年得四品。郭曰、阿婆錯。品少者官高、品多者官小。何婆曰、今年減一品、明年減二品、後年減三品、更後年減四品、更得五六年總没品。郭大罵而起。

崇仁坊阿來婆彈琵琶卜、朱紫填門。浮休子張鷟曽往觀之、見一將軍、紫袍玉帶甚偉、下一疋紬綾、請一局卜。來婆鳴弦柱、燒香、合眼而唱、東告東方朔、西告西方朔、南告南方朔、北告北方朔、上告上方朔、下告下方朔。將軍頂禮既、告請甚多、必望細看、以決疑惑。遂卽隨意支配。

8 阿来婆については、『太平広記』の同じ巻二八三に、「阿來」と題して別の記事が載る。出典はやはり『朝野僉載』巻三で、彼女は厭魅の術で韋后に用いられたが、平王によって誅殺されたという。また唐宋史料筆記叢刊本『朝野僉載』が、巻末「補輯」に明・陶宗儀『説郛』巻二からとして引く武三思の記事にも、来婆の名が見えるが、いずれも琵琶トへの言及はない。何婆に関しては、他に資料が見当たらない。

9 中華書局校点本（一九八一年）によれば、原文は次の通り。

唐郎中白行簡、太和初、因大醉、夢二人引出春明門。至一新塚間、天將曉而回。至城門、店有鬻餅餂飠乞者。行簡餒甚、方告二使者次、忽見店婦抱嬰兒。使者便持一小土塊與行簡、令擊小兒。行簡如其言擲之、小兒便驚啼悶絶。店婦曰、孩兒中惡、令人召得一女巫至。焚香、彈琵琶召請曰、無他故、小魍魎爲患耳。都三人、一是生魂、求酒食耳、不爲祟。可速作餂飠乞、取酒。逡巡陳設、巫者拜謁、二人與行簡就坐、食飽而起。小兒復如故。行簡既寤、甚惡之。後逾旬而卒。

10 以下の邦訳箇所の原文は、次の通り。

次於潼關、主人有稚兒戲於門下。乃見歸以手挃其背、稚兒卽驚悶絶、食頃不寤。主人曰、是狀爲中惡。疾呼二娘、久方至。二娘巫者也。至則以琵琶迎神、欠嚏良久、曰、三郎至矣。傳語主人、此客鬼爲祟。吾且録之矣。言其狀與服色、眞歸也。又曰、若以蘭湯浴之、此患除矣。如言而稚兒立愈。浦見歸所爲、已惡之。及巫者有説、呼則不至矣。

11 この箇所の原文は、「以琵琶迎神、欠嚏良久曰」となっている。「欠嚏」の語は珍しく、他に用例が見当たらないところから、李剣国『唐五代伝奇集』は「欠伸（あくび）」と改めるべきかとする。しかし、『太平広記』諸本はいずれも「欠嚏」に作っており、この原文を尊重すべきであ

ろう。「欠」はアクビ、あるいはアクビのように口を大きく開けること、「嚏（嚏）」はクシャミを言う。神降ろしの際のクシャミは、温庭筠「燒歌」にも詠われている。この詩は焼畑農業の賽神を詠っていて、「仰面呻（一作呼）復嚏、鴉娘（一作雅孃）咒豐歲（うたのの）」の句が見える（『温飛卿詩集箋注』巻三、『全唐詩』巻五七七）。「鴉娘」は巫女のこと、黒衣を纏っているのであろう。また、『太平広記』巻三一三・神二三の「葛氏婦」（出典は後周・王仁裕『玉堂閑話』）が参考になる。五代、葛従周の息子の嫁のもとに、彼女を見初めた天斉王祠の三郎神君が通ってくる話で、注目されるのは、三郎君が訪れる際の記述である。原文には「毎神將至、婦則先伸欠呵嚏謂侍者曰、彼已至矣」とあり、読み下せば「神の将に至らんとする毎に、婦は則ち先づ伸欠呵嚏して侍者に謂ひて曰く、彼は已に至れり、と」となる。つまり、神が訪れる（言い換えれば憑依する）際には何時も、この女性は先ず「伸欠（あくび）」と「呵嚏（くしゃみ）」をしている。ここから明らかなように、巫女の「欠嚏」は決して偶発的なものではなく、神の到来と憑依を知らせる重要なシグナルだったのである。

ところで山内昶『もののけⅠ』（法政大学出版局、二〇〇四年）によれば、口は古代より魂の出入り口と考えられていた（六九頁）。とすれば、口を大きく開いての吸気は、神霊を体内に呼び入れる行為ではないかと想像される。また、クシャミが出ると人が噂していると考えるのは、『詩経』にまで遡る上古からの俗信である。これを他者が自身に向けて放ったメッセージの感受と取れば、神霊との交感における巫女の「欠嚏」の意味も、おおよそ納得がゆこう。なお、拙稿「クシャミの俗信」（横浜国立大学『古典教育デザイン』4（二〇一九年三月刊行予定）において、中国を中心にこの俗信を取りあげてみた。併せて参照されたい。

12　該当箇所の原文は、次の通り。

…遂擇良日、於其内、洒掃焚香、施牀几於西壁下。於簷外結壇場、致酒脯、呼嘯舞拜、彈胡琴。至夕、令許君處於堂内東隅、趙生乃于簷下垂簾臥。不語、至三更、忽聞庭際有人行聲。趙生乃問曰、莫是許秀才夫人否。聞吁嗟數四、應云、是。

13　この資料に関しては、太平広記研究会「『太平広記』訳注（七）―巻二百八十三「巫」付「厭呪」―」（広島中国文学会『中国学研究論集』第一六号、二〇〇六年）の「まとめ」に指摘がある（九九～一〇〇頁「3　巫術の方法」）。

14　原文は次の通り。

南平國蠻兵、義熙初、隨衆來姑熟。便有鬼附之、聲呦呦細長、或在簷宇之際、或在庭樹上。若占吉凶、輒先索琵琶、隨彈而言。於時郄倚爲府長史、問當遷官、

云、不久持節也。尋爲南蠻校尉。予爲國郎中。親領此土。荊州俗語云、是老鼠所作、名曰鬼侯。

この蛮兵の話は南朝宋の劉敬叔『異苑』巻六にも収められ、若干の字句の異同が見られる。なお、歳を経た鼠が予知能力を持つことは、晋・葛洪『抱朴子』内篇巻一・対俗第三に、『玉策記』なる書を引いて「鼠は寿三百歳なり。百歳に満つれば則ち色白く、善く人に憑きてトふ。名づけて仲と曰ひ、能く一年中の吉凶及び千里の外の事を知る（鼠壽三百歳。滿百歳則色白、善憑人而卜。名曰仲、能知一年中吉凶及千里外事）」という。老鼠の仕業と考えられたのは、この古い俗信によるものであろう。

15 高国藩『中国巫術通史』（鳳凰出版社、二〇一五年）は、第十八章第二節「武則天、唐中宗信巫術」において琵琶トを取り上げ、敦煌莫高窟の「反弾琵琶図」と結びつけている（四八六～九頁）。西域との繋がりという点では興味深いが、検討の余地を残そう。

16 原文はいずれも四庫全書本に拠った。

17 高国藩氏には、『中国民俗探微 ―敦煌巫術与巫術流変』（河海大学出版社、一九九三年）の著作もあり、その第四章第二節「巫師的楽器」には、唐代の琵琶トが取り上げられている。しかし、宋代以降に関する記述においては言及がない（六二～四頁）。また劉黎明『宋代民間巫術研究』（四川出版集団巴蜀書社、二〇〇四年）の「第二章 宋代民間巫師」には、「第三節 宋代民間巫師通神的方式與法器」の項がある（四九～六三頁）が、ここにも琵琶トは見られない。ただ同書が引く元・呉莱「北方巫者降神歌」に、「酒肉 滂沱たりて几席を静め、箏琶朋はせ（あ）指（とどこほ）りて霜風に凄（さむ）し（酒肉滂沱静几席、箏琶朋指凄霜風）」の句が見える点は注目される。

追記

小論執筆に際し、澤崎久和氏（福井大学）より貴重な教示をいただいた。李賀「神弦」と胡琴に関する二話、および唐・段公路「禱孟公祝詞」（『唐文拾遺』巻三二）の資料的価値、いずれも氏の御指摘によって気づいた。（段公路の文は小論には取り上げなかったが、神降ろしの際の弦楽器の演奏と「嘘」の描写が見える。）また高国藩『中国巫術通史』については、資料コピーを御送付いただいた。以上、記して学恩に感謝申し上げる。